The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | Trip to Toronto |
| Author(s) | 高原, 耕平 |
| Citation | 未来共生学. 2016, 3, p. 177-192 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/56259 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪から見たトロント

# Trip to Toronto[1]

**高原 耕平**
大阪大学大学院文学研究科博士前期課程

## #1　荷造りをする

こんにちは。これから私たち2期生13名は、カナダ・トロント大学へ2週間弱の研修にゆきます。

荷造りをしてみると、スーツケースがいっぱいにならなかった。なにか入れ忘れた物があるんじゃないか、と思いました。なにかがさびしい。静かな23時です。こちこちと夜が更けて、荷造りが終わります。

わたしたちの目的は、カナダの多文化主義（multiculturalism）を現地トロント大学での講義で学び、また、その主義の有り様をじかに理解することです。カナダという国は、フランスとイギリスがケンカしてゆくうちに成立した国です。あるいは、もともとその地に住んでいた先住民や、先に独立したアメリカ合衆国やイギリス本国と揉めたり仲直りしたりしながら、戦後はヨーロッパ以外からも移民を少しずつ受け容れながら、形作られてきた国です。

写真1. 大阪国際空港の出発ロビーにて

そのような歴史を持つ国で鍛えあげられてきた「多文化主義」の現実をわずかなりとも理解することで、わたしたち自身の在り方や、私たち自身の街や社会や組織や国の在り方をより深く理解できるようになること。これが、さしあたり私たちに求められていることだと思います。

そんなことできるのかなぁと思ってしまう。

あまり肩肘張ったカッコイイお題目を書きすぎると、足元をすくわれるかもしれません。まずは、そのときその場所で触れ得たものごとを、すなおに楽しみたいとおもいます。

トロント研修の様子を短報でお届けします。

（2015年4月29日）

### #2　到着する

12時間のフライトを経てトロントに着きました。エア・カナダ（Air Canada）の機長は英語とフランス語の両方でアナウンスをします（フランス語はなぜか早口感がある）。空港内の案内表示も全て英語とフランス語の両方で表記されています。売店でジンジャエールを買うと店員さんに「サンキュー」ではなく「メルシー」と言われてドギマギしました。しかし別にメルシーでもなんでも、たいてい私は何か言われるとドギマギしている。

日本の2月ぐらいの気候だと脅されていましたが、そこまで寒さは感じません。日本のじっとりとした冷え込みよりも、空気の透明さ。首筋がそっと毛羽立つかんじ。陽があれば、上着を一枚羽織ってマフラーを巻いていれば大丈夫です。街路樹の枝先には小さな芽が伸びかけています。

空港からホテルにバスで向かいますが、道路沿いに高い建物がほとんど無い。おおむね3階建て。日本のように都市が上に伸びていない。水平方向に薄く広がっている。

人通りは比較的あるけれど、ごったがえすというかんじではない。道と建物の間隔、建物と建物の隙間の程度が心地よい。ぴったりぴったり足を地面に置いて歩く犬。

写真2. トロント大学のロバーツ図書館

教会や図書館など古い建物はみなレンガ作りで、赤茶けた灰色をしています。細い蔦を壁に這わせている建物もあります。教会のステンドグラスは小さくて地味です。商店も公共の建物も、ごてごてぴかぴかしたかんじがあまり無いことに好感を覚えます。

明日はいよいよ授業が始まります。

（2015年4月30日）

### #3　Lots of Sun, High Clouds.

今日から授業が始まりました。コーディネーターを務められるサツカ・シホ（佐塚志保）先生によるオリエンテーションのあと、ボニー・マッケルヒニー（Bonnie McElhinny）先生が「カナダにおける多文化主義と植民地主義の歴史の概観」という題目の講義を行いました。

ボニー先生の講義の中でわたしがハッとさせられたのは、そもそも「土地」についての感覚が非常に異なるのではないかということでした。カナダやアメリカ合衆国の場合、入植時代には未開拓の土地が文字通り見渡す限り広がっていた。大地とはとにかく広いものだった。そこは無限に入植者を吸収する場所だった。日本の場合、土地とは人々がそこにぎゅうぎゅうと寄り集まって住まざるをえない「寸土」である。

したがって日本においては、肩を寄せあって干渉しあい監視しあいながらなんとかお互い共に生きてゆく、ということを出発点として、「共生」の方途を探らなくてはならない。そこではしばしば「折り合いを付ける」という表現が使われるけれど、この「折り合い」という表現をどう英訳すればよいか困ってしまう。おそらくこの表現の裏

には上述の「向こう三軒両隣のぎゅうぎゅう感」が少なからず存在していて、このニュアンスがわからなければ「折り合い」ということばも伝わらない。

一方、北米の入植者たちにとって問題となったのは、いかにしてこの大地を切り拓き、じぶんの住む場所を確保するかということだった。植民者達は過酷な自然にあらがうために助け合わなければならないけれども、それぞれの得た場所で何を考えどのように生きるかは自由だった。空間的なキャパシティは多様な文化の並立と共存を許した……と言うと単純化がすぎるかもしれないけれど、少なくとも日本とは出発点が違う。

実際のところ、たとえばアメリカ独立戦争でイギリス側に味方したアメリカ人（かれらはロイヤリストと呼ばれた）は、独立派が勝利したあと、カナダへ逃げ込みそこに住み着こうとした。だれかが逃げこんできたら、じゃあここらへんに住んでたらいいよ、と言えるスペースが有り余っていた。これが日本であれば、「賊軍」はどこへ逃げてもけっきょく逃げ切り隠れきることはできない。水戸の天狗党しかり、新選組しかり、義経しかり、西南戦争の士族しかり、さいごには追い詰められてハラキリさせられるのがオチであって、それぐらいならいっそ敵陣に潔く白刃斬り込みをかけて散華の美を飾ろうということになる。

ハラキリや破れかぶれの斬り込みがなぜ「潔い」のか実はさっぱりわからないのだけれど、狭い土地で譲り合って生きていくことができなければ、内に向かう敵意は内部浄化というかたちをとる。このことと、ファシズムがしばしば「清潔さ」と結びつくことは無縁ではない気がする。「美しい日本」とはしばしば「あいつらのいない清潔な町」を意味するだろうし、「共生coexistence」はこの清潔志向への反発として存在する。一方で、「多文化主義multiculturalism」は清潔さへの葛藤を出発点とするのではない。かれらの出発点は「terra incognita」（未開の地）である。

写真3. トロント市街の再開発事業について説明を聞く

などと考えていました。午後には大学の案内をしていただきました。長くなりましたので、いったん文章を終えます。

（2015年5月1日）

### #4　大気を吸う

雨が降りました。教室を出ると石畳が黒く濡れて、大気のトーンが切り替わっていました。顎を空に突き出すと、ふっと肩と眉間の奥のしこりが溶けてゆくような感覚がありました。ぴんと張った空の弦をだれかがそっとゆるめたみたいでした。そのあと幾秒ずつの間隔を置いて小さな水滴が頬になんども触れました。

トロント研修はちょうど全日程の折り返し地点に達しました。郊外へのフィールドトリップ（現地調査）と教室での授業を交互に受けています。

「First Nation」（先住民）の文化に触れるフィールドトリップでは、バスの中で先住民の青年にウサギの毛皮を触らせてもらいました。さらりすべすべというかんじで柔らかく暖かく、みんな楽しそうでしたが、いま考えるとオリエンタリズムの傾向が無いでもない。

私たちが宿泊するホテルはトロント大学のすぐそばで、少し歩くと瀟洒な観光街に行くこともできます。RA（Research Assistant）のニコラスさんが「トロントの、ギンザみたいなものですね」と日本語で説明してくれました。トロント銀座の逆方向に歩くとスーパーやコンビニ、飲食店があります。陽が沈むと、物乞う人々がどこからか現れて歩道に腰掛けます。目を合わせないようにして通り過ぎると、たまに何かを叫びます。ビクッとします。

歩道の端に、直接地べたに座り込むと、視線は下から上に伸びます。170センチの眼の高さから見下ろしている私の視界とは、自然とパー

スペクティブが異なるはずです。彼ら彼女らの眼には、なにがどのように映っているのだろうかと思いました。

（2015年5月4日）

### #5　女王様の園で

朝の散歩にゆきました。6時半ごろホテルを出て、東へ顔を向けるとビルとビルの隙間から曙光がまっすぐ瞼を照らします。まばたきの中で額と頬、くちびるが強ばり、温まり、既に頻繁に往来している通勤の自家用車の間で、わたしの顔はふちどりを取り戻します。

Bloor通りを東へ少し歩き、Queens通りとの交差点を右に曲がると人類学博物館や美術館が立ち並んでいます。法学部の新しい建物が建設中です。淡いオレンジ色（日本ほどカラフルではない）に染められる博物館の石壁を右手に眺めながら南下すると、Queens Parkという公園にたどりつきます。

公園には樫やメープルの木が枝をゆっくり広げていて、そのまわりを黒いリスがせかせかと走り回っています。私たちが歩き回っている範囲では、トロント市街にはカラスと猫が全くおらず、そのかわりリスが街路樹の周りにたくさんいます。

このリスたちは、かわいいけれどちょっとキモいです。日本で一般的にイメージされるリスより二回りくらい大きい。樹の幹を頻繁に昇り降りしているからか、前脚の筋肉が隆々としていて、真正面から見ると肩のあたりはかわいい小動物というよりワニやトカゲのようです。地面を走るときは、両前脚を同時に着地させます。犬や猫のような走り方はしません。ぴょこん、ぴょこん、立ち止まり。

写真4. 公園からの帰り道、朝7時

ぴょこん、ぴょこん、立ち止まり。どちらかというとウサギの走り方に近い。雪が積もるからでしょうか。

歩道沿いの地面にはアリの巣もありました。日本のアリより色が薄く、すこし臆病な性格に思えました。気温が低いからか、動きがあまりせわしなくありません。のったりのったり、巣穴の周りでゆっくり仕事を始めているようです。日本のアリは、もっとクリンクリンと動きまわります。

いまから最後の講義が始まります。

（2015年5月6日）

### #6　中間的感想

カナダにおける「multiculturalism 多文化主義」と日本における「共生 coexistence」の違いや共通点を見出し、お互いに学び合うことが、今回のわたしたちの研修の基礎的な問いです。

ではけっきょく「multiculturalism」とは何なのか。

わたしが講義や現地調査を通じて（その狭い範囲で）強く感じたのは、カナダで言われる「multiculturalism」はきわめて実践的なこと、制度的なこと、立法にかかわることである、ということです。

講義に参加していても、現実の問題をケース・スタディとして議論のテーマとして提示し、その解決策や、ケースから見いだされたより一般的な論点を列挙させ、おのおのの持つアイデアやその背景にある「多様性」への理解を互いに討議させます。

講義での議論は抽象的なレベルで行われますが、つねにかならずその抽象的議論を具体的な施策に落としこむという感覚がある。だからこそ、講義で学んだ内容が「施行」された場所として再開発地区などの現地学習が可能になるとみなされている。

だから、授業に参加しながら、理想や未来を語り合っているというよりは、どことなく日本で言うところの「税制」の実務的議論をしているような気持ちになります。

とはいえ、「multiculturalism」への愛というか誇りのようなものも

講義を持っていただいた先生方から強く感じます。

かれらはしばしば、アメリカは多文化といっても「melting pot」(坩堝)で「assimilation」(同化)を強いるが、我がカナダは「salad bowl」(サラダボウル)であり、同化でなく個々の文化を尊重するintegrate(統合)を目指しているのだ、と言います。

「multiculturalism」はカナダの国是であると言えますが、手放しでそれを自賛するのではない。「multiculturalism」が逆に人種主義を増幅し隠蔽しているのではないか、多文化主義がネオ・リベラリズムに乗っかってしまっているのではないか、「super-multiculturalism」とでも呼ぶべきものを模索すべきではないか、といった議論を積み重ねている。

ここらへんのノリは、強いて言うならば、日本の憲法9条をめぐる議論と似ているかもしれない。

たとえばカナダでは移民の受け容れ規定を経済的・理念的な理由により戦後何度か大きく改訂しています。植民と移民(そして先住民との対立・和解)によって成り立ってきたカナダという国家にとって、移民に関する法律を改正することのインパクトは、たとえば日本におけるカンボジアPKO派遣をめぐる議論や、有事法制・集団的自衛権をめぐる混乱のそれと同種のものではないかと感じます。

(2015年5月6日)

### #7　不安の明るい夜の底で

多文化主義／未来共生というテーマとほとんど関係が無いと思うのですが、ここに来てみてどうしても書きたくなったことがあります。

それは緯度のことです。

トロントの緯度は大阪に比べて高い(北極に近い)。大阪市の緯度がおよそ北緯34度であるのに対し、トロントの緯度はおよそ北緯44度。日本でいえば旭川と同じくらいだそうです。

緯度が高いほど、夏は昼が長く、冬は夜が長くなります。大阪から来た私たちにとって、トロントの日没はとても遅く感じます。5月初旬の今、日本では18時ころから「夕方」に入りますが、ここトロントでは20時でもまだ明るい。

このことは、単なる「時差ボケ」以上に私たちを苦しめたように思われます。「お腹が空いているのにまだ外は明るくて時計を見るともう20時、アレェ？」という体験を何度もしました。ジェット・ラグならぬサンセット・ラグがあるのです。

日没の時刻だけが違いではありません。もっとなにかが違うのです。強いていえば、空が暮れてゆく色合いが違う。というか、「空が【暮れる】」という表現自体が合わない気がします。トロントの日没は夕暮れや夕焼けではない。この時期だけのことかもしれませんが、トロントでは、青空のまま天球全体がじっくりと暗くなってゆく。そこには緯度だけでなく湿度や風の早さといったことも関係があるように思います。透明度。空が暗くなってゆくとき、夜の闇が上から垂れ込めてくるのではなく、逆に、街の方が宇宙へ向かってせりあがってゆくような感覚があります。

ゲオルゲの詩の中に「早くも　差し交わす枝々のかなたに／星々の都市と至幸の野が現れる」[2]という一節がありますが、トロントの夜更けはこの「星々の都市が現れる」イメージに近い。

写真5. メンバーの誕生日を開くことができました

一方、『バガヴァット・ギーター』に「万物の夜において、自己を制する聖者は目覚める。万物が目覚めるとき、それは見つつある聖者の夜である」[3]という一節がありますが、この湿度を含んだ夜のイメージはトロントの夜と正反対であるように思われます。

大気からなめらかに光が剥ぎ取られてゆく一方、地上の繁華街では光と音とが増えてゆきます。そ

れは天の静けさと暗さが深まってゆくのを少しずつ補うかのようです。レストランや酒場には人があふれ、狭い往来で露天商が仲間と笑い、交差点のそばで金管楽器が煌めきます。夜を楽しむ、という文化があるのだと感じました。

日本の夜の繁華街はまた異なったトーンがあります。緯度の違いが夜の過ごし方の違いとして現れている。それは当然の現象ですけれども、地球全体、宇宙全体のサイズから見ればほんのちょっとの住んでいる場所の違いなのに、ここまで大きく変わるものかとふと驚かされます。

来てみて初めてわかったことのひとつです。

（2015年5月9日）

**#8　映画のこと**

荷造りをしています。いまトロントは5月9日土曜日の23時です。こちこちと夜が刻まれてゆきます。昼間ナイアガラの滝を観に行っていた同室のXさんが、寝返りを打ちました。

＊＊＊

昨日、研修の最終イベントであるワークショップが終わりました。そのあと、図書館でカナダ先住民族の「residential school」（「寄宿制」学校）に関する記録映画“The Spirit of Sayt-K'ilim-Goot: One Heart, One Path, One Nation”を観ました。

わたしは以前の記事で、カナダの多文化主義の歴史を紹介するとき、「先住民と揉めたり仲直りしたりしながら…」というように書きました。

それは、間違っていた。「揉めたり、仲直りしたり」といった生易しいことではなかった。わたしは何も知らないまま無思慮に書いていた、ということです。

映画の内容はきわめて「しんどい」ものでした。しかし同時に再生と回復、芽吹きの印象を強く与えるものでもありました。わたしはスクリーンから視線を外すことができませんでした。研修旅行の疲労とストレス、それから少しばかりの感傷が寄り募り昂っていた最後のタイミングで、この映画を観ることになりました。それは予想外の打撃をわたしに与えました。

なぜ予想外だったのだろう、と今になって思います。つまり、「先住民についての記録映画」と言われて、わたしはなんとなく、人畜無害の娯楽作品を予期していたのではなかったか。歌と踊り、「エキゾチック」な民族衣装、紛争と和解、新たな多文化主義への歩み、というような。

そうではなかった。

いま手元に資料が無いのですが、「residential school」とはカナダ政府が先住民族（First Nationと呼ばれます）の同化政策のために作った「寄宿制」学校です。先住民族の子どもを親元から強制的に引き離し、故郷から離れた学校に集団で住まわせ、かれらを「西洋人」「キリスト教徒」に変質させるべく教育する。1930年代から80年代までこの政策は続けられ、のちにはカナダ首相が公式に政策の誤りを認め謝罪しました。

子どもたちを親と故郷から切り離し、文化的精神的に「根こぎ」にするというコンセプト自体に目眩がします。しかしそれだけではない。配布された簡潔な資料によれば、衛生・栄養状態の劣悪さのため各地の「residential school」で合計4,000人以上の子どもが死亡したことが確認されており、また学校内部での身体的・性的虐待も常のことであったということです。

それは「揉める」「対立する」といった言葉で表現しうるようなものでは、おそらくなかった。双方が主体的なアクターとして振る舞いながら歴史のダイナミズムを織り上げてゆくような出来事ではなく、一方が他方の精神を矮小な正義の芝刈り機で轢き潰してゆくような「処理」だった。

映画は、この学校に実際に入れられていた人々（Residential School

Survivorと呼ばれる）が2011年に行った「ヒーリング・ジャーニー（Healing Journey）」を追ったものです。

旅は、かれらサバイバーが、廃校となったかつてのResidential Schoolに集まるところから始まり、かれらや、その学校に赴任したかつての教師へのインタビュー映像が挟まれ、さいごに地元のFirst Nationのひとびととの祭りと会食が盛大に行われます。

内容はただそれだけで、激しいストーリーや劇的な告白や感情表現といったことは無いにひとしい。そうした脚本は用いられず、カメラは旅の一行の表情を静かに追ってゆきます。

学校は小さな湖畔の町にあり、一行がフェリーを降りると、船着場に地元のFirst Nationのひとびとが待っている。初めて出会う同胞たちが、保護と手当ての必要な傷ついた客人として敬意を持って出迎えられる（『風の谷のナウシカ』5巻で蟲使いたちの支族が集結するシーン、また7巻で土鬼の避難船が風の谷近くに難破漂着するシーンを思い出す）。

かれらが実際に入れられていた（入れられていた……どう表現すれば良いのだろうか。「そこで学んでいた」？　違う。そこに「収容されていた」？「そこから生き延びた」？　……「学校を生き延びる」とは、いったいどういう事態なのだろうか、と思ってしまう）学校の廃墟で、かれらが第一に言うことは、なにより、「わたしはここにいました」ということです。

わたしはここにいました、と宣明することの決定的な意味。破断点。

その空間は、かれらサバイバーにとってトラウマの震源地であると言えます。当事者がその空間に肉体を置きなおすことは、何を意味するのでしょうか。そこでは何かが再び痛々しく破断し、決して届かぬ取り戻せぬものをかろうじて涙滴が癒着しようとする。けれど同時に、その空間は、どうしても立ち戻らなければならない場所としてかれらに現れている。「わたしはここにいました」が「ここにいたのがわたしなのです」に転化する。個人の原点が暴力の記憶に据え付けられる。

写真6. だいたいこんなかんじでやっていました

おそらくどのような種類の災害であれ、サバイバーは「グラウンド・ゼロ」に立ち戻ろうとするのではないか、と思いました。ニューヨークのツインタワー跡地であれ、原爆ドームであれ、神戸の東遊園地であれ、そこへ繰り返し回帰することが、もはや定言命法のように彼らの実存に組み込まれている。それはある種の巡礼に属することであって、もはや「なぜそこへ立ち戻るのか？」という問いが効かないような行為である。かれらサバイバーにとって、そこに繰り返し立ち戻ろうとするということ自体が「なぜ？」以前の下部構造を形成しており、むしろあらゆる「なぜ？」はその不断の回帰衝動の上に芽吹くものとなる。

地元の先住民のリーダーあるいは祭司のような人が付き添い、おそらくは部族の伝統に従って、涙をにじませて教室の隅に立つサバイバーの体に、無言でお香の煙をふりかけていました。それは狭義の医療的な「治療」行為ではない。ましてや「癒やし」という、もはやどこでも用いられている日本語でカバーできるものではない。それが何であるか私はうまく言うことができないけれども、そこで起こっていたことは、なにか治療や回復といったことを超えて意味のあることではなかったか。いわゆる「文化」（ここでは「First Nation」において護られてきたもの）とはそのために有るのではないか。

＊＊＊

長くなりましたので、いったん稿を閉じます。わたしたちが学んだカナダの多文化主義はおおむねヨコ方向のもの、すなわち今おなじ時と社会を生きているさまざまな文化グループ同士の共存共栄を

考えるものでした。しかし最後に見せられたこの記録映画では、タテ方向の問題、つまり記憶と歴史、暴力と和解という局面での多文化主義について考えることになりました。

（2015年5月10日）

### #9　Keep Fighting

11日にメンバー全員帰国いたしました。

いろいろな出来事や経験があり、それらをひとつずつほどき出し、思い起こそうとしながら、全体の印象を摑まえようとしますが、やはり一言で表現できるものではないようです。

けれど、いま仮に今回の研修旅行と「multiculturalism」の印象を、答えではなく一つの問いのかたちとして表現するならば、それは「なぜトロントはひとびとを世界中から惹きつけるのだろうか」ということになります。

トロントの人口は約250万人、そのうち約半数が移民です。同程度の人口規模である大阪市（266万人）に置き換えて考えてみると、すごいことだなと思います。

カナダに移住を申請する際、すでに家族親族がカナダで生活基盤を築いている場合、申請が通りやすくなります。裏返して言えば、先に外国から移住して職と家を確保した人が、母国から家族や親族を呼び寄せるということが、カナダが安定して移民を受け入れる一つのメカニズムとなっているはずだということです。その「呼び寄せメカニズム」がうまく機能しているのは、なにより先に来た人が「呼び寄せたくなる」からだと思います。

「おまえもこっちへ来い、いろいろたいへんだけど、ここには何かがある。幸せになれるし、食っていけるし、受け入れてもらえる」と言える。その〈何か〉、故郷の家族や同胞を呼び寄せることを躊躇させないものが存在している。それが、わたしたちが学んだ「多文化主義」の奥でほんとうに脈動していることにちがいない。

日本には、この「呼び寄せたくなる何か」「惹きつけるもの」があるのだろうか、とも思います。もちろん、移民に関してはカナダと日本は歴史も伝統も態度も政策も基準も、全てが異なる。また、わたしはここで、日本は移民をより広く受け入れるべきである、という立場から話を進めているのでもありません。

むしろそれ以前のことがらなのです。

いま確かに、日本では労働力不足を補うために、移民に対する門戸を拡げるべきか否かの議論が始まりつつある。賛成・反対いずれの立場にも一定の説得力があるかもしれません。

けれども、それはどこか一人よがりの議論になっているのではないか。つまり、日本政府が政策を変更して、今後はより積極的に移民を受け入れます、と言えば、それだけでたくさんの人々が世界中からやってくるということを賛成派も反対派も暗黙の前提にしているのではないか。

惹きつけるもの、家族を故国から呼び寄せたくなるものが、ほんとうにこの国にあるだろうか。なるほど確かに、伝統的な文化財や最新のアニメーションなど、商品として輸出宣伝できるものはたくさんある。けれどそれは消費されるもの、無に帰してしまうものである。そういったパッケージとしての「我が国」ではなく、もっと静かで目立たない、五年や十年の政治政策では決して鋳造できはしない、自信に満ちた、矛盾や問題を受け止める奥行きがあり、季節のめぐりと調和した、開かれた雰囲気が。「ああ、わたしもここにいていいんだ」と感じさせる何かが。

写真7. トロントの街にて

それは「ただいま」「おかえり」「ようこそ」がうまく機能する社会であるかどうか、と言い替えることができるかもしれません。「home」あるいは「住む」というこ

と。

この国が移民を真に受け入れるならば、かれらに「ああ、わたしもここにいていいんだ」と感じてもらわなければならない。ところが、移民を受け入れるか否か以前の問題として、はじめから日本に生まれ住んでいる「わたしたち」自身が既に、「ここにいていいんだ」と感じることが難しくなっているのではないか。

以上が旅の問いと印象ですが、ことばがだんだんうわずってきた気がいたしますので、文章を閉じたいと思います。

＊＊＊

たくさんのことを書き残しましたが、本レポートはこれで最後にさせていただきたいと思います。長々とお付き合いいただき、ありがとうございました。

講義を担当していただいたボニー・マッケルヒニー先生、ギリッシュ・ダスワーニ（Girish Daswani）先生、ジョシュア・バーカー（Joshua Barker）先生、RAのみなさん、またコーディネートの労をとってくださったサツカ・シホ先生に厚くお礼申し上げます。

（2015年5月14日）

## 注

1　2015年度未来共生トロント大学多文化研修（2015年4月29日～5月11日）では、トロント滞在中、参加履修生の一人（本エッセイ著者）が本プログラムのウエブサイトで現地活動報告「Trip to Toronto（2期生高原さんの独占ルポ）」を担当した（http://www.respect.osaka-u.ac.jp　2015/12/04アクセス）。日々更新されていく履修生の学びや気づきを、一部割愛しつつ本誌に掲載する（編者コメント）。

2　手塚富雄訳『ゲオルゲ詩集』岩波文庫、1972年、12頁。

3　上村勝彦訳『バガヴァッド・ギーター』岩波文庫、1992年、42頁。